

■シラバス

授業の目標 Course Objectives

環境と社会との関係をさぐる学問である環境社会学の考え方、手法を学ぶ。

到達目標 Course Goals

環境社会学・地域社会学の考え方や手法の基礎を身につけること、とくに関連した文献購読、聞き取り調査、資料収集、そしてディスカッション、さらには質的データの処理・分析ができるようになることが目標である。

授業計画 Course Schedule

(1) 人々は地域の環境とどうかかわってきたのだろうか、(2) 人びとは地域の環境や社会をどうしようと考えているのだろうか、(3) 誰がどういう形で地域の環境保全やまちづくりの担い手になっていけばよいのだろうか。この3点を今年のゼミでは考えたいと思います。ゼミでは、このことを、文献購読（さまざまな事例の文献、環境社会学関連の文献）、聞き取り調査（フィールドワーク）、ディスカッションを通じて考えます。

とくに何回か聞き取りを中心にしたフィールドワークを行います（週末などを利用します）。

また、3年生以上は個人研究を適宜発表します。

成績評価の基準と方法 Grading System

演習への出席度・参加度と各種課題へのとりくみを総合的に評価します。

■授業の取組・工夫等について

1. 演習の目的

この科目は、文学部で社会学や地理学・社会生態学を専門的に学修している学生たち（2～4年生）に提供している演習科目である。これらの学生に対し、地域社会学・環境社会学の考え方や手法を身につけてもらうのがこの演習の目的である。ちなみに受講者は必ずしも4年次の卒論で私を指導教員にする学生だけではない（その割合は半分程度）。他学部や他専攻の学生も毎年何人か受講している。

演習において私が重視しているのは、(a) ディスカッションを通して考える能力を身につけ、(b) 文献・資料を読みこなす能力、そして (c) フィールドワークを通して現場で学ぶ能力を身につけることであり、この三者を有機的に修得することである。とはいえ、それらをバランスよく提供するのは言うほど易しくない。とくに (c) のフィールドワークをどう効果的にゼミで行えるかは、その年の状況によって大きく左右される。

2. フィールドワークの重視

2009年度は幸い、日高町役場からまちづくりへの協力を要請されたので、それをこのゼミの学生たちと一緒にこなした。日高町（旧日高町地区）において、これからの日高町について考えるというプロジェクトにゼミとして関わらせていただいた。（これは2009年度のゼミの前期と後期を通して行なったので、以下では通年のゼミについて述べる）

まず日高町の歴史や現状を文献から学び、現地を視察し、徐々に日高町の概要をつかんだ上で、住民たちとのまちづくりワークショップ（これは私がファシリテーターとしてかかわった）に何度か参加し、住民たちと今後の日高町について考えた。学生たちは住民から学び、住民も学生から学んだ。住民たちと一緒に日高町を何度かめぐり、地域資源（地域のお宝）を再発見していくというプロセスにもかかわった。こうした参加は土日を使うこ

ともあったし、平日に車で学生たちを連れて行って参加することもあった（受講生全員ではなく、毎回都合のつく学生たち数人を連れていった。少なくとも一回は行くように促した）。現場での学びは大きい。私が学生たちに提供できることは、ともかく現場に学生たちを連れて行き、いろいろなコミュニケーションの場を設定することではないかとも思う。

3. 文献購読とグループディスカッション

一方、通常のゼミの方では、並行して、「地域社会」「環境」「まちづくり」をめぐるいくつかのトピックについて文献を読み、グループディスカッションを繰り返した。文献報告の際は報告者が必ず論点を提示し、それについて議論することが求められる。私からも各文献につき2、3の討議テーマを提示しておく（なるべく議論になりやすいテーマを設定することが重要）。幸か不幸かこの年は受講者が多く、32名ものゼミ受講者がいたが、こうした文献報告やディスカッションは5～6名のグループに分かれて行うことで学生たちの「参加」を促した（したがって文献報告は同じものを5人程度の学生が読んできて各グループで報告する）。日高町で見聞きしているものと関連するような文献を選び、それらが有機的につながるように仕掛けた。そうすることによって、学生たちは日高町の現場で見聞きしたことと文献上の議論とを関連させながらディスカッションすることができた。「こう書かれているけれど、日高町ではこうだった。だからこう考えればよいのだろうか」といった、リアリティをもった議論が生まれてきた。文献報告のグループディスカッションに加え、何かしらの課題を考えるワークショップ形式のグループディスカッションも何日か行なった。

グループディスカッションは、私の授業において（講義でもゼミでも）中心を成すものである。ピア・ラーニング（相互学習）の効果が大きいことは長年の教育で十分にわかっている。教員が「知識」をたくさん話すよりも、学生同士で議論する方が、よほど学生たちには学びになる。教員が行うことは、議論の場を設定し、適切な議論の素材・テーマを提供することである。素材はなるべくリアリティをもって議論できるようなものがよい（その意味でも「現場」はいちばんの素材である）。学生たちは実はディスカッションが好きである。私はずっとディスカッション中心の授業をしてきているので、3～4年生は比較的慣れていて、グループの中で議論をリードしてくれる。教員とTAは、グループを回って聞き、ときに「これについてはどう考える？」と、議論のポイントを提案する（ただし、教員やTAはなるべく介入しない方がよい）。

4. 質的データの分析も学ぶ

とはいえ、「現場」はそんなにすっきりした論点が出ないものではない。複雑な「現場」から何を導き出せばよいか。それを学ぶため、やはり日高町でグループに分かれて12名の住民たち（主に高齢者）への集中的な聞き取り調査を敢行し、それを大学に持ち帰ってテープ起こしするという練習を行なった。さらに、質的データ分析ソフト（MAXQDA）を使ってテキストデータにキーワードをつけ、さらにそれを体系化していく質的データ分析法も学修した。現場で知り得たことを「分析」という作業は、ゼミで簡単にできるものではないが、ふだんディスカッションで学んでいる「問題点を引き出す」ということを活かして、現実のデータから何が言えるか、聞き取りデータから何が言えるかを、ボトムアップで積み上げる作業の練習をしたことになる。

5. 課題

本来であれば、1年間のこうしたゼミでの調査研究活動を報告書（ゼミ論集）にまとめ上げるまでできればベストであったが、2009年度はそこまでには至らなかった。（そのかわり、

私たちが参加した日高町のプロジェクトから『ひだからBOOK』という冊子が生まれた→
<http://www.town.hidaka.hokkaido.jp/tourism/hidakara/hidakara.html>)

フィールドワーク、文献購読、ディスカッション、データ分析、これらを有機的に組み合わせることが社会科学系のゼミの理想的な運営だと言える。もちろん週 1 回のゼミでそれを全部やろうとすることは難しいし、最初からきちんと計画を組み立てることはなかなか難しい。実際私のゼミは毎年試行錯誤であり、走りながら計画を立てている。さらには、他の講義や実習との連携、学生の自主ゼミとの連携も課題だ。TA や鍵となる学生を使ってゼミ運営をすることが重要だが、それも毎年うまく行くわけではない。ゼミは「なまもの」であることがおもしろいところでもあり、難しいところでもある。

(参考)

- ・ 関連する私の教育・研究活動については<http://miya.let.hokudai.ac.jp/>を参照してください。
- ・ また、大学教育におけるグループディスカッション、ピア・ラーニングについては、パークレイ他『協同学習の技法』(ナカニシヤ出版) など参考書・理論書がいくつもあります。

■ 学生の自由意見 (良かったと思う点)

- ・ 様々な社会的問題を扱っていて、とても面白かったです。
- ・ MAXQDA (質的データ分析ソフト) の使い方を習得することができたこと。
- ・ いろいろなことを考えさせられて、すごい刺激になった。
- ・ ディスカッション形式の授業だったので、さまざまな人の意見を聞けたり、自分の意見を発言でき、知識を深めやすかった。
- ・ 日高のまちづくりに関わるなんてなかなかできないことなので、非常にためになった。
- ・ 非常に、学術的にだけでなく、役に立つことが多かった。面白いトピックも沢山あった。
- ・ 発言を促していた。
- ・ たくさん議論できたこと。
- ・ 学生による参加型学習を重要視している点で評価できる。
- ・ 学生同士で議論せたこと。
- ・ みんなの意見をいっぱい聞くことができて、すごく刺激になった。
- ・ 先生の説明の仕方。
- ・ 全員が授業に参加できる形でよかった。
- ・ グループで話し合うことが多かったので、様々な人の意見が聞けて、良かった。
- ・ グループ形しきであったため、発言がし易く、又、みんなの面白い意見をたくさんきけた点。
- ・ ・日高に行く機会をたくさん与えて頂いたこと。・ディスカッションで色々な人の意見を聞いた。